

生物基礎，生物

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

生物基礎

1 前 文

「生物基礎」は、日常生活や社会との関連を考慮し、科学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則などの理解と、それらを活用して科学的に探究を進める過程についての理解などを重視する科目である。(共通テスト問題作成方針より)

今回の受験者数は119,730人であり、昨年度より5,768人減少し、全受験者数の25.40%であった。理科の他の基礎科目と比較すると、最も受験者数が多かった。また、平均点は24.66点であった。各科目の平均点については、「物理基礎」は28.19点、「化学基礎」は29.42点、「地学基礎」は35.03点であった。「生物基礎」と「地学基礎」の平均点の差が比較的大きいものの、平均点格差による受験者への影響はそれほどないと言える。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の八つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

今年度は、学習指導要領に定める項目である、「生物と遺伝子」、「生物の体内環境の維持」、「生物の多様性と生態系」の3分野の全てから幅広く出題された。第2問Aでは第1問の出題範囲である「生物と遺伝子」から酵素に関する問題が、第3問Aでも同様に第1問の出題範囲である「生物と遺伝子」から代謝に関する問題が出題され、「生物基礎」では昨年度なかった大項目をまたぐような問題が復活した。

内容については、大問それぞれに各大項目に関連した実験やデータを提示し、問題に答えさせる出題がなされており、実験を設定し結果から考察する問題や水槽内の物質循環という身近な話題について考えさせる問題など、基本的な知識をそのまま問うだけでなく、探究の過程に沿った実験、観察等の思考力・判断力・表現力等を問う問題が出題された。

第1問Aは、原核生物と真核生物の比較と葉緑体が共生した際の代謝における遺伝子発現の変化に関する設問であった。問2については、細胞内共生説について、藻類が動物細胞に取り込まれた直後と、その共生が長く続いたときを比較することで遺伝子発現の変化を考察する設問であった。自然の事物現象を時間的な視点で捉え比較する理科の見方・考え方を働かせる良問である。

第1問Bは、細胞周期に関する総合的な設問であった。問3についてはDNA複製開始点の数を求める計算問題であったが、正答率は32.09%であった。日々の授業改善について、指数計算や条件整理をしっかりと行う必要性が感じられた。一方で、問題出題方針において「観察、実験、調査の結果などを数学的な手法を活用して分析し解釈する力を問う問題」が、毎回出題されているが、問3については単に指数の計算力を問う設問であった。今後の出題において、単なる計算力を求めるのではなく、例えば「生物基礎」追試験の第3問B問5のようにデータを図式化する等、数学的な思考力を問う出題をお願いしたい。

第2問Aであるが、最初に、実験2の図を訂正する問題訂正があった。図の訂正は致し方ないが、基礎科目はそれだけでなくも解答時間が少なく、問題訂正があると受験者は訂正の意図を理解することに時間を要することになる。今後、正確な出題をお願いしたい。内容に関しては、胆汁と酵素の

働きに関する実験を題材にした対話文形式の設問であった。問1は典型的な実験区の組合せを選ぶ問題であり、対照実験をしっかりと理解しておく必要があった。実験結果を検証する対照実験の重要性を意識させる、日ごろの授業改善に資する、メッセージ性の高い良問であると言える。問2は実験から得られた結果がどの実験の組合せであったかを問う設問であった。仮説を立て検証実験を行い、結果から考察するという探究の過程を表した設問であった。胆汁の脂肪の乳化を提示し、白く濁った部分が層Zであることを問題文で説明することで、受験者が考察しやすく、また、水と油は分離するという小中学校で学習した知識を活用し、実験結果から結論を導き出せる良問であった。

第2問Bは、自然免疫に関する基礎知識を問う設問と、基礎知識をもとにした実験、考察の設問であった。問5は免疫系を操作した3系統のマウスそれぞれに対する実験について、マウスが生存した理由として正しいものを選択する設問であった。実験1～3の結果から、免疫の仕組みを理解していれば、実験結果から推察できる、知識だけによらない良問であると言える。

第3問Aは水槽の生態系内の物質循環という身近な話題について考えさせる設問であった。問1は生態系内のエネルギーの流れに関連し、代謝の単位である光合成についての基礎知識を問う設問であった。これまでも、大単元をまたぐ出題は共通テストから出題されており、「共通テスト作成方針」には「特定の事項や分野に偏りが生じないように」とある。単元を横断する問題を用いることにより、教科書等に扱われないものを適切な量で出題しつつ、思考力・判断力・表現力等を問うことができるので、今後もこのような出題をお願いしたい。問3は問題文を基に、水槽の生態系から窒素を取り除く操作を問う設問であった。窒素を含んだ水草を取り除くことには気付くことができたが、外部から入れた魚について判断に迷った受験者が多くいたと推察する。

第3問Bはバイオームの特徴に関する設問であった。問4は教科書にも取り上げられることの多い気温・降水量とバイオームの関係を示すグラフから、それぞれのバイオームにおける植物の特徴や地理的な分布などを考察し、選択肢の中から選ぶ設問であった。バイオームの知識を直接問うのではなく、世界のそれぞれのバイオームの特徴から考察させる選択肢の工夫があった。選択肢がバイオームの特徴として、植物の種類や日本での地理的分布、世界での地理的分布と多岐にわたるが、そこまで難しい選択肢ではないのに対し、正答率は44.46%となっている。これは、特に①の選択肢において、コケ類・地衣類を「菌類や地衣類」と記載してあることに加え、コケ類・地衣類を植物と見なしてはいけないことなど、基本的事項の定着がおろそかであったからではないだろうか。また、コケ類・地衣類を実際に見ていない受験者も多かったことが推察され、日頃の授業での実物での確認やフィールドワークの重要性を感じさせる設問であった。問5は、人工衛星で捉えた地方の反射光のデータから植生の様子を推定する技術を題材に、バイオームの特徴の知識を基にグラフを読み取る設問であった。気候とバイオームの関係性をしっかりと理解し、それぞれのバイオームの特徴を押さええていれば、新しい技術を用いた内容であったとしても、グラフの特徴から、バイオームを特定できると思われる。正答率は、バイオームC 17 が63.96%、バイオームE 18 が77.59%であり、教科書でしっかり学習した内容が生きるこのような問題は、受験者の自信につながる良問であると言える。

3 分量・程度

今年度は、大問数は3で、大問ごとにA、Bの中間が設定される形式であり、大問数、中間数は、昨年度と同じ、小問数は昨年度より1減って15、第2問A問1が三つの結論に対して、それぞれ比較した試験管を選ばせるため、解答枠が三つ、第3問B問5では、二つのバイオームにそれぞれ対応したグラフを選ばせるため、解答枠が二つあることなどから、解答数は昨年度より1増えて18であった。ページ数に関しては、昨年度より4ページ減って14ページであった。

全体としての分量は，共通テストに変わって以降，問題数が増加し続けている。問題数の削減等，検討が必要であろう。

ページの配置においては，昨年度同様，今年度も問題に関する図やグラフが見開き2ページ以内に収められており，内容の読み取りやすさが向上し，ページをめくることの時間のロスが少なかったと思われる。

全体の平均点は24.66点であり，昨年度よりは0.76点上がったが，5割には届かなかった。大問ごとの平均点の差はほぼなかったが，過去3年間の他の基礎科目と比較した平均点を比較すると，「生物基礎」の平均点が最も低い。基礎科目として適正な難易度の出題をお願いしたい。

第2問B問5は，免疫系を操作した3系統のマウスそれぞれに対する実験について，マウスが生存した理由として正しいものを選択する設問であった。三つの実験をそれぞれ検討し処理しなければならず，情報量は多くなったが，選択肢は各マウス，及び実験に対する二択が三つ続く構成となっており，受験者も情報を整理しやすく解答しやすかったのではないだろうか。題意の把握に時間がかかる問題については，このように選択肢を単純化したり，整理したりすることで受験者への負担が軽減するので，来年度もこのような形式の問い方をお願いしたい。

第3問A問3では，生態系に関する基礎知識を基に，水槽内の生態系の保全を考えさせる良問であったが，正答率が21.94%と低くなっている。外部から持ち込んだ魚が，水槽に存在する水草を食べることで，外部から持ち込んだ魚に窒素が移動したことを，その水槽の生態系内の窒素が外部に移動したと誤解したのではないかと推察される。外部から持ち込んだ魚は外部の生態系に所属するのではなく，水槽の生態系に加わったことを確認する記述が必要だったのではないだろうか。

4 表現・形式

全体として，受験者にも分かりやすい表現が用いられており，理解しやすいものであった。特に，第3問Aは，水槽の生態系内の物質循環という身近な話題について考える問題であり，このような，生活に関連した話題からの出題は，学習指導要領でも示されている，「日常生活や社会との関連を図りながら，生物や生物現象について理解する。」という目標にも合致していると考えられる。

形式的には，ほぼ全ての大問で，実験やデータを示し，その内容について考察する問題が出題された。六つの中間のうち，第2問Aでは会話文が用いられており，形式としては探究型の問題となっていて，登場人物の会話をとおして探究を深めていくものであった。このことは，昨年度と同様の傾向であり，今後もこの傾向が続いていくものと思われる。

第1問B問5については，DNAの複製における基質の取り込みに関する設問で，見慣れない内容やグラフであるが，細胞周期の各期で起こっている内容とDNA量の変化が分かれば単純な内容である。しかし，問題文での解答に関連性の少ない条件文やグラフの下に新たな注意文などが，受験者の戸惑いを引き起こす原因となっていると考える。説明する上で条件文は重要であるが，受験者の混乱を招くような書き方にならないように配慮していただきたい。

選択肢の作り方について，「過不足なく」は1問で，「組合せ」を答える問題が多かった。しかし，整理して考察できるように選択肢の工夫があり，問題としての完成度は昨年度に比べて高まったように感じる。

今後も，選択肢については，受験者にとって有用な思考を必要とさせる形式となるよう，十分配慮していただきたい。

5 ま と め（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストは、より共通テストの問題作成方針を反映したものとなっていた。特に、実験結果から合理的な推論のみを的確に考察するなど、高等学校での基本的な知識・技能を活用し、生徒自らが主体となって学ぶ探究的な学びの重要性を色濃く示しており、今後もその傾向は続くものと考えられる。このことから、授業改善については、これまでの教師主導での一斉授業から、生徒主体での探究的な学びへとドラスティックな変革が強く求められていることを示唆するものであり、学校現場における早急かつ積極的な授業改善が望まれる。なお、指数関数等の数的処理についても、「生物基礎」を履修する生徒に対して、納得感をもって習得させることが重要であろう。

○意見・要望・提案等

今後の試験問題の作成に対し、以下の提案・要望を行う。

- ・自然現象に興味をもち、日頃の授業を大切に学習を進めることにより、その成果が正しく反映される基本的な知識問題と、生物の知識を基に、与えられた情報を読み取り生命現象を分析・考察する思考問題がバランス良く出題されるようお願いしたい。
- ・思考力・判断力・表現力等を問う設問では、「生物基礎」の知識を基本とし、それを活用・探究することで、科学的なものの見方や考え方が正しく評価できるよう問題作成をお願いしたい。
- ・基礎を付した科目の中で、履修生徒の最も多い「生物基礎」は、いわば最も影響力のある科目とも言える。そのため、「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」「地学基礎」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、問題の難易度を是非調整していただきたい。
- ・最後に、今年度の共通テストが、昨年度、及び一昨年度実施の共通テストや、これまで長きにわたり実施されてきたセンター試験、更には、今後の受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に、適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮をもって作成されてきたこと、本委員会の提案を受け、改善に向けて真摯に取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。

生 物

1 前 文

「生物」は、科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する科目である。（共通テスト問題作成方針より）

今回の受験者数は57,895人であり、昨年度より781人減少し、全受験者数の12.28%であった。理科の他の科目と比較すると、「地学」に次いで受験者数が少なかった。また、平均点は39.74点であったが、「物理」との平均点の開きが20点以上あったため、得点調整が行われた結果、48.46点となった。なお、評価に当たっては、14ページに記載の八つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

内容については、「令和5年度大学入学選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」にのっとり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したり、科学的に探究する過程を重視したりすることを求める設問が、基本的な概念や原理・法則などの理解を背景に作問されており、おおむね適切であった。実験、調査の結果などを数学的な手法を活用して分析し解釈する力を問う問題も含まれていて、受験者の知識・技能や思考力・判断力・表現力等を総合的に問うことができていた。しかし、全ての大問が、受験者にとって既知でないものも含めた資料等に示された事物・現象を基に考察する力を問う設問であったことは、受験者の負担が大きかったと考えられる。

範囲については、学習指導要領に定める「生命現象と物質」「生殖と発生」「生物の環境応答」「生態系と環境」「生物の進化と系統」の5分野の全てから幅広く出題され、バランスも適切であった。また、昨年度と同様に、同じ大問の中にあつて分野をまたぐ設問が複数出題された。

第1問は、シアノバクテリアの環境に依存した遺伝子発現調節を取り上げた設問で、基本的な知識の確認を基に、実験結果の解釈について思考力を問う良問であった。問3は、遺伝子の発現調節についての基礎的な知識を背景に、適切な実験計画を考察する設問であった。問4では出題分野が変わり植物の系統を扱った設問であるが、それまでの題材と関連する内容ではあるものの、問4は独立した小問となっており、第1問全体として融合問題とはなっていなかった。しかし問4は、系統についての知識と思考力をバランスよく確認する良問であった。

第2問は、「生物の環境応答」における視覚と嗅覚を題材としただけでなく、Aは進化について、Bはニューロンの興奮について問う盛り沢山の内容であった。問3は、感覚細胞の特異性や閾値に関する理解を基に、匂い物質の種類と興奮の大きさについての表から、嗅細胞の性質を読み取らせる良問であった。問4は、ヒトが嗅細胞の種類よりも多くの匂いを識別できる能力について、計算によって解答を導き出す設問であったが、解答には高校生物の知識は必ずしも必要ではなく、計算能力を専ら問う内容であった。

第3問は、植物の光合成における強光ストレスを扱った設問であった。強光ストレスに対する植物の生理的応答は高校の授業でほとんど取り上げられないが、学習指導要領に定める学習範囲内から逸脱した知識を要求することなく、植物ホルモンについて教科書的な知識を確認した上で、実験データの読み取り、及び考察する力を問う適切な問題であった。問2は、強光ストレス下における植物細胞の葉緑体運動を材料に、葉を透過する光の透過率が光の波長に依存してどのように変動するかについて、最適な図を選択させる設問であった。葉緑体運動を取り上げたことに加え、教科書

で取り上げられることが少ない光の透過率を図に用いたため、解答に戸惑った受験者が相当数いたのではないかと思われる。

第4問は、植物の窒素やリンの代謝について、生態系や、根粒菌との共生を含む幅広い範囲から出題された融合問題であった。問2は、生態系における物質収支についての基本的な理解を、通常は直接取り上げられない「量」に着目して問う良問であった。問4は、根粒菌による窒素固定と植物による呼吸の相互関係を題材とし、代謝反応の模式図を利用して簡単な数学的考察力を問うとともに、窒素同化について基礎的な知識も問う融合問題となっており、適切な設問であった。しかし、「同じものを繰り返し選んでもよい」は意図が不明な指示で、受験者を混乱させたのではないだろうか。問5は、植物の根粒菌との共生が有利となる条件について、問4をヒントに丁寧に誘導しながら考察させる良問であるが、この題材は多くの受験者にとって初見かつやや難解であったと考えられる。

第5問は、ショウジョウバエの初期発生における母性効果遺伝子のはたらきを題材に、メンデル遺伝についての簡単な計算とともに、実験計画や結果の考察を組み合わせた、やや複雑な融合問題であった。

第6問は、生物の個体群内の個体間の関係について、動物の縄張りを取り上げて、基本的な知識を確認するとともに、面積に依存して変化する利益と労力の大きさから最適な縄張りの大きさを考察させる設問であった。問1は、種内競争と種間競争について、基礎的な知識を問う設問であった。問3は、縄張りの維持によって個体が得る利益と労力の大きさが、面積だけでなく環境に依存して変化することに気付かせる考察問題で、数学的な思考を要する工夫された良問であった。

3 分量・程度

大問数は6であり、昨年度の共通テストと同様、選択問題がなかった。第2問のみにA、Bの中間が設定される形式であり、小問数は合計23、解答数は合計28であった。小問数は昨年度より3問減ったが、解答数は昨年度と同じであった。問題のページ数は29ページで、昨年度より1ページ増えた。全体として、分量は昨年度の共通テストとほぼ同じである。会話文は第6問だけで、リード文に冗長な部分は見受けられない。しかし、ほとんどの大問で、複数の場面設定や複数の実験が含まれているため、ページ数やテキストの量から受ける印象よりも、問題の条件を理解するのに時間が費やされ、受験者が本質的な考察に取り組むための絶対的な時間が不足したと思われる。

平均点は39.74点であり、昨年度より約9点も下降した。理科②の「生物」と「物理」で20点以上の平均点差が生じたことから、得点調整が実施されるに至ったことは周知の事実であるが、昨年度の平均点が既にセンター試験を含めて過去最低点であったことを鑑みると、このような2年連続の大幅な難化と低得点は、高校生の理科②における科目選択にネガティブな影響を必ずもたらさそう。その影響が長く残り、解消されるまでの行程もまた容易でないことは想像に難くない。

個別の問題で見ると、第2問Aは「生物の進化と系統」の、遺伝子重複による機能獲得変異を扱っていて、複雑な過程の考察を要求する問題であった。しかし、問1で遺伝子重複に関する基礎的な知識を確認した上で問2に進むという丁寧な展開となっており、問2で示されるデータも分かりやすく、場面設定は最小限かつ明確な良問であった。自然選択についての基本的な概念の理解を背景に、遺伝子頻度が環境に依存して変化することを工夫して問うことができていた。問2については、学力を識別する機能も高かったのではないかと推察される。

第3問の問2は、興味深い設定で一見平易な設問であるが、六択問題にも関わらず正答率が13.16%と低かった。これは設問中に、多くの受験者にとって初見の設定が重なったためと考えられる。一つ目は実験1の葉緑体運動で、これは標準的な授業ではほぼ取り上げられないため、平易な

模式図で提示できたとしても、受験者が戸惑うことに留意するべきであった。二つ目は高校生物の教科書でよく取り上げられる吸収スペクトルが、本問の光の透過率とは逆向きの指標であることである。また選択肢において、青色光と赤色光にピークをもつ二峰型のグラフを多く揃えたために、多くの受験者は、透過率を調べた実験であることに、更に気づきにくくなり、正答率が押し下げられたと考えられる。

第5問の問1の19は、五択問題であるにもかかわらず正答率は8.34%と低すぎる結果となった。高校の授業におけるメンデル遺伝の問題演習の機会が以前よりも限られているため、多くの受験者にとってこのような確率計算は難問となっているという側面がある。本問では要求される計算過程は相応にシンプルであったが、受精卵の100%が成虫まで発生するという受験者の意表をつく正答と、この解答が次の確率計算に関係していると誤解させるような表現が、受験者を無用に混乱させたのではないかと考えられる。

同じく第5問の問4の正答率は11.48%であり、共通テストとしては適切でない難問と言える。しかしながら、内容は本質的には複雑ではなく、探究の場面を想定し、適切な思考力を求めている良問であった。本問の欠点は、大問の最後になって新たな四つ目の実験が登場したため、受験者が思考を一旦リセットする必要があるが、解答のためには先に戻って前の三つの実験の結果を踏まえなければいけない、という不親切な構造にあると思われる。しかも最初の空欄ウで、問4で問われる内容としてはやや意外な、対照実験の基本的すぎる方法について問うたため、多くの受験者が問題の意図を取り違えてしまったのではないかと考えられる。また、「実験1～3の結果を踏まえて」とあるが、解答のために実際に重要な情報は、「変異体の雌から生じた受精卵は成虫まで発生しない」という実験1の結果だけであったのではないだろうか。以上のように、動物の初期発生についての知識や理解を活用するよりも、問題の場面設定や実験の条件を把握することに、受験者の時間と思考をいたずらに費やさせてしまったと推察される。

4 表現・形式

第5問を除く全ての問題で、受験者の理解に役立つ図表や模式図がふんだんに与えられていた。会話文は第6問のみであったが、探究の場面を想定した出題や、既知ではないものの、受験者の興味や関心を惹きつけるような題材が注意深く選ばれていた。計算などの数学的処理を必要とする考察問題では、計算そのものは複雑になりすぎないように配慮されていた。また、生物学的知識の獲得を前提にしなくても解答が可能な問題は、一昨年度と異なりほとんど見られなかった。授業において、単純に知識を暗記するのではなく、思考力・判断力・表現力を発揮しながら探究の過程に取り組むことを重視しなければならないことが、改めて明示された出題となっていた。

しかし、全体として受験者には既知でなく、かつ複雑な設定を用い過ぎたきらいがある。また、第3問、第4問、第5問のように、初見かつ複雑な設定を含んだリード文を読ませた上で、その直後に独立した内容の小問を一旦挟むというレイアウトが、これらの大問を更に読みづらくかつ理解しづらくさせていた。問題の本来の出題意図を明確にするためにも、受験者の負担を軽減するためにも、このような大問の構成や小問の配置には工夫と改善が強く求められる。

第1問の問4では、植物の系統進化を扱っており、派生形質を利用して系統樹を推定する能力を問う良問であった。シャジクモ類が植物に最も近縁である、というやや細かい知識を背景にしているために正答率は26.44%とあまり高くなかったが、考察の過程でこの知識を欠いた誤答選択肢に部分点が与えられたのは、受験者の学力を測るための優れた工夫であった。同様の部分点を、もっと多くの他の問題でも設定するべきである。例えば、第5問の問4では、「実験1～3の結果を踏まえて」という設定が理解できなかった受験者の場合、③または⑥を誤って選択してしまったのではな

いかと思われる。知識の不足に対してだけでなく、このような考察の過程が部分的に妥当な解答にも、相応の得点を与えることを検討するべきと考えられる。あるいは、本問のような複雑な思考が必要な小問では、受験者に考察にじっくり取り組むための時間を与えるために、思い切って選択肢の数を減らすべきであると考え。更に昨年度の報告書で既に指摘されているように、「誤り探し」や「過不足なく」など正答を選ぶに当たって時間を要する形式が多用されていること、また問題ごとに形式が異なることによっても、受験者の本質的でない負担が増しているのではないかとと思われる。選択肢の形式については、受験者の知識理解や思考力を測るために必要な形式であるという観点からだけでなく、全体として負担が大きくなり過ぎないように、改めて配慮していただきたい。

5 まとめ（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストは、共通テストの問題作成方針の意図を色濃く反映したものとなっていた。特に、実験結果から合理的な推論のみを的確に考察するなど、高等学校での基本的な知識・技能を活用し、受験者自らが主体となって学ぶ探究的で深い学びへの改善をより強く示唆しているものと考えられた。このことから、授業改善については、これまでの教師主導での一斉授業から、生徒主体での数的処理を含む探究的な学びへとドラスティックな変革が強く求められていることを示唆するものであり、学校現場における早急かつ積極的な授業改善が望まれる。

○意見・要望・提案等

今後の試験問題の作成に対し、以下の提案・要望を行う。

- ・自然現象に興味を持ち、日頃の授業を大切に学習を進めることにより、その成果が正しく反映される基本的な知識問題と、「生物」の知識を基に、与えられた情報を読み取り生命現象を分析・考察する思考問題が、バランス良く出題されるようお願いしたい。更に受験者に、解答に直接つながる本質的な考察をさせるだけの時間が担保されているか等、個々の大問のみならず、「生物」の問題全体において、適切な出題をお願いしたい。
- ・思考力・判断力・表現力等を問う設問では、「生物」の知識・技能を基本とし、それを活用・探究することで、科学的なものの見方や考え方が正しく評価できるよう問題作成をお願いしたい。
- ・「生物」履修者が漸減している現状は、生物学全体の振興に影を落とすことに繋がりにかねず、当委員会としても大変危機感を抱いている。今後、「物理」「化学」「生物」「地学」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、問題の難易度を是非調整していただきたい。
- ・最後に、今年度の共通テストが、昨年度、及び一昨年度の共通テストやこれまで長きにわたり実施されてきたセンター試験、さらには、今後の受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮をもって作成されてきたこと、本委員会の提案を受け、改善に向けて真摯に取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。